
闇鳥のウタイカタ

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇鳥のウタイカタ

【Nコード】

N8184C

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

チームを組んでるロットとルーに引きずられ、ギルドの仕事に精を出す日々。どうにも最近面倒なことに巻き込まれつつあり、最上級にいい迷惑ではあるのだが、こいつらのせいにはかりもしてられないのはどうしたものか……。

序章（前書き）

まえがき

本作は、先日完結した「闇鳥のトビカタ」の続編となっておりま
す。この作品単体でも楽しめるよう気をつけてはいますが、前作の
ネタバレを大いに含みますので、「闇鳥のトビカタ」から読んでい
ただくことをオススメします。

序章

面倒事、と一口に言っても、その内容はその時々、人それぞれである。

仕事が面倒な人もいるし、通勤が面倒な人もいる。食事や睡眠が面倒な人もいるかもしれないし、暇な時間が面倒だと言う人がいる可能性も否定できない。つまり、森羅万象すべてが「面倒事」になり得るのである。

しかしそんな迷惑なものにも、そうなるためにいくつか条件がある。

その一つが「やらなければならない」「やるべきである」ものだということ。別にやらなくてもいいことなら、ただでさえ面倒なことなのだ、みんな喜んで無視する。仕事なんてしなくても金が空から降ってくるっていうなら、俺は一日中昼寝に興じることになるだろう。もっとも、そのうち降ってきた金を拾いに行くのも面倒になりそうだが……。

——さて、

面倒だと思いつつも、俺がこれをやらなければならない理由と言うのは、簡単に言えば自分自身のため、自分の安全のためだ。俺の情報がかしこに流れないようにしておかないと、俺は結構危うい状況になってしまうのである。秘密結社から命からがら逃げ回ったり、さもなくば殺されてしまう未来が想像できる。だから、それを防がなければならない。やりたくなくても、やらなければならない。

つまりは、そういう因果関係。

そんな当然で根本的で、その割に何ら意味もないことを考えている俺の目の前にあるのは、無表情の白髪ショートヘア。よくはわからないが、どこことなく考え込んでいるような雰囲気を出しているふと、その白い前髪を揺らしながらその少女——ワイトホール

——は視線を上げ、

「……わかった。……つまりあなたは……殺し屋の家系に生まれた……殺し屋の見習いで……最近『闇鳥』と呼ばれている……『黒石』ナイフ使いである。……そしてこの前……『カザミドリ』の幹部を死に追いやった張本人であり……その時に『黒石』のナイフを使っている……ナイフのことがばれると……あなたは……命を狙われてしまう……ということ」

「そういうことだ」

俺は頷く。

ずいぶんと物騒な会話をしているように見えるが——俺自身もそう思うが——しかし、俺達の周りには馬鹿笑いをしながら談笑している酔っ払いしかいない。俺達の会話なんて聞いている様子はまったくないし、この騒音では遠くから盗聴することもできないだろう。俺はそれを見込んでこの場所を選んだんだ。

夕飯の時刻もとうに過ぎた十時少し前、すでにレストランから酒場へと雰囲気が変わった食堂で、俺とワイトはカウンター席に並んで座っている。

互いの椅子を斜めにして向かい合っているので、顔が近すぎる気がしないでもないが、これも用心のため。ワイトがそういうことを気にするようじゃなくてよかった。変に意識されると、こっちが困る。

「……で？」

ワイトは呟くように言った。

俺は首を傾け、

「で？——とは？」

「……私は……それを聞いて……何をすれば……いい？」

「特に何も」

俺は何ともなしに答える。

「とりあえず、これを他言しなければそれでいい。見返りが欲しいっていうなら——まあ、できるだけ、甘んじて受けるけど」

「……特に必要ない」

ワイトは静かに首を横に振った。

「……あなたを守る……ためなら」

「そうか、そりゃありがたい」

予想の範疇内ではあるが、しかし希望通りの結論が出て俺は少し安心する。テーブルに並んでいる空っぽの料理皿の代金は当然ながら俺もちで、それが面倒である理由の一つではあるのだが、それで済むなら安いもんだ。

俺は椅子から立ち上がりながら、

「じゃあ、今日の話はこれで終わりだ。このことを知っているのはお前——と、一応アンディさん——ただだから、何か問題が起こった場合はお前に頼みごとをするかもしれない。そんな時は、まあ、頼むよ」

「……わかった」

顎を垂直に振るワイト。

「じゃあ、な」

言いながら俺は伝票を握り、レジの方へ歩き出した。ちらりと振り返ると、ワイトは席に着いたまま、呑み残していたジンジャーエールを口に含んでいる。

「……他の話は、また今度にしておくか」

呟きながら、俺は肩越しにワイトの左腕を見つめた。

図書館と思い出・前編

「わっわっ！」

後方から叫び声が聞こえたかと思うと、

——バサバサバサバサッ

今度は紙が散らばったような音。

振り返るとそこには、あから様につまづいて、抱えていた数冊の本を壮大に撒き散らしてしまったという状態のルーが、床に倒れて腰をさすっていた。ご丁寧にも、その青いセミロングの髪が上からはっくり本に噛まれている。

「いったー……」

「……大丈夫か？」

一応気にかけているような声はかけておくが、別段駆け寄ったりはせず、俺は俺で抱えている本を隣の棚の方へ運んでいく。ルーがつまづくのも何かを落つことすのめいわば茶飯事で、そんなもんをいちいち気にしてたら、終わる仕事も終わらなくなってしまうのである。

ルーは周りの本を拾い集めながら、

「もーっ！ 本って、何でこんなに重いのっ？」

「……大事な本なんだから、ぞんざいに扱うなよ」

言いながら、俺は運んできたハードカバーを一つ一つ棚に入れていく。

「ったく、いくら屋内だからって、そんなロングスカートはいてくるなよ」

「だってこれ、昨日買ったばかりで、早く着たかったんだもん」

「さつきから裾を踏んづけてばかりじゃないか。サイズ合ってるのか？ 大体、そんな大人っぽい服、お前には似あわな——」

——ギラッ、と鋭い視線。

「——くもないよ？」

俺が愛想笑いを見ると、ルーは表情を崩してにへらと笑う。

俺は嘆息しながら視線を前に戻し、再度仕事に集中した。そして本棚と睨めっこしつつ「やれやれ」と呟いた瞬間、

——ボタンッ

入口の扉が勢い良く開かれ、そこから駆け入ってきたのは、赤い短髪のティーンネイジャー、ロット。息を弾ませながら、

「敵がこつちのこなかったか？」

俺たちに尋ねる。

「て、敵っ？」

「ああ、人類の敵だ」

世界を巻き込む大戦争の攻撃開始命令を下そうとする軍の最高司令官のような顔で頷くロット。しかしその右手に握られているのは、丸められた新聞紙。

「……ロット、お前今、何と死闘を繰り広げてるんだ？」

「決まってるじゃないか！」

ロットは仰々しく叫ぶ。

「ヤツだ、ヤツ！ あの悪魔のような存在だ！ 長年我々にあだなしてきた生命体！ かつての《てくのろじ》ですら、やつらを滅ぼすことは叶わなかった！ 女子供すら恐怖のどん底に陥れる諸悪の根源！ 私がこの手で成敗してくれる！」

と、ロットの右側、壁際で黒い点がモソッと動いた。ロットは目を鋭く光らせ、

「そこかあっ！」

叫びながら身を翻し、新聞紙でもって鉄をも切り裂きそうな斬撃を壁に食らわせる。

しかしその黒い点はひらりとその軌道をかわし、空中へ飛び上がってドアから廊下へ出て行ってしまった。

「おのれえっ！」

体勢を立て直し、ロットはそれを追いかける。

「……まあ、ヤツのことはロットに任せよう」

「……そうだね」

身震いしながら言って、俺とルーはそれぞれの作業に戻った。

——今回、俺たちが請負ったのは『図書館の本整理』。

ここ、俺たちが住む町『アステル』にある国立図書館から、蔵書の整理を行う仕事の依頼がギルドに来たのである。

ギルドに登録している賞金稼ぎである俺たちは、当然ながらその仕事を請負う選択肢を十分なまでに持っていたわけで、仕事の時間と労力と賃金がなかなか魅力的だったもんだから俺は嬉々として請負うことを提案したが、当初チームメンバーであるロットとルーは渋った。渋りやがった。

その反論は、

「地味だな」

「おもしろくなさそう」

というもの。

お前らは仕事を何だと思ってんだと怒鳴りたい衝動を懸命に押し殺しつつ、俺はこの仕事の利点をとくとくと語り聞かせ、次の仕事までのツナギという位置づけでようやく請負うに到ったのである。隣でキノコ狩りの仕事を賛成2、無回答1で難なく可決した知り合いのチームが何とも羨ましかったことは言うまでもない。

結局のところこいつらは、どんな仕事であれ必要以上に騒がしくしてしまうのだ。地味もつまらなさも、関係ないだろうに……。

本のカバーの埃を払いながらチラッと腕時計を見ると、現在時刻は午後三時。

朝の九時からこの建物にこもり、何万冊とある蔵書を番号順に並べ直しているわけだが、全十二部屋中、終わっているのは七部屋。今日の夜までに終わるかは微妙だが、終わらなかつたら明日の午前中もまた来ればいいか、と思っていると、

——パタンッ

再び扉が開く音。

黒い生命体がまたこの部屋に紛れ込んできたのかと振り返ると、そこにあつたのは赤い短髪ではなく、ぼさぼさの白髪頭。この図書館の館長であるジェス力さんが杖をつきながら、俺たちにとっこり微笑みかけている。

「どうです？ 順調ですか？」

「少し時間がかかってますが、そこまで大幅に遅れてはいませんよ」

「そうですか、それはよかった」

孫の兎戯を見守るような表情のジェス力館長。

「……あれ？ ロット君が見当たりませんか？」

「ああ、あいつは害虫駆除の方を担当してて、そこら辺を駆け回ってますよ」

「ああ、そうでしたか。だからさっき、いらない新聞紙はないかと聞いてきたんですな」

ジェス力さんは納得顔。白いローブを引きずりながらこつちへ歩み寄ってきて、

「ところで、もう三時ですし、どうです、おやつでも？」

「え？ おやつ？ そんな、悪いで——」

「食べる食べるっ」

俺の言葉を遮り、ルーがジェス力さんの方へぴょんぴょん駆け寄っていった。

図書館と思い出・中編

テーブルの上には、大きな皿に並べられたクッキー群と、湯気を吐いているカップが置かれている。ほのかに漂っているのは、紅茶の上品そうな香り。

「ささつ、遠慮なさらずに召し上がってください」

向かいに座っているジエスカさんがにっこりと言うと、

「いただきますっ」

と叫びながら、ルーが俺の横で、大食いラーメンのタイムトライアルに挑戦するかのようにながつき始めた。手と口をせかせかとせわしく動かしている。目を凝らせば、クッキーがルーの胃袋の中にどんどん積みあがっていく様子が透けて見えそうだ。オヤツつてのは通常、空腹を満たすためにあるわけじゃないだろうに。

そのさらに隣では、

「ふむ。ほへはひひへすな」

とクツキーをかじりながら、ロットが感慨深げな表情で呟いている。

さすがにこいつを放っておいたまま休憩に入ると後で何を言われるか分かったもんじやないので、こいつも一応ちゃんと誘ってやった。呼びに行ったときもまだ新聞紙を握った状態で走り回ってる最中で、ヤツとの勝負の行方は一体どうなったのかとても気になるところではあったが、ロットの敗北を知らされた場合今日一日気が気でなくなるので、聞かないことにした。知らぬが花というか、花畑だ。

そんな二人を横目で見つつ嘆息しながらも、俺もクツキーを一つ頂くことにする。……………あ、おいしい。

こうやって紅茶をすすっていると、自然と気分が落ち着いてくるのはなぜなのか。さっきまで酷使していた肩や腕のこりも、勝手にほぐれていく感じた。思いつくものとしてクツキーや紅茶の甘露に

よるところもあるだろうが、やはり一番の理由はこの雰囲気だろう。
俺たちがいるのは、本棚に囲まれた一室。今日最初に整理した部屋だ。

白いカーテンでいくぶん緩和された日光が、窓から差し込んでいる。吹き込んでくる風も爽やかなもんだ。「静寂」なんていう言葉で形容するのが一番しっくりくる。雑音なんかとは無縁の世界。：

……俺の右隣を除けば。

首を回して、クッキーを次々と口に放り込んでいく青髪少女をジト目で見つつ、後でもう一度ここをほうきで掃かないか、と思っていると、

「ふふ、そんなに急いで食べなくても、まだまだありますよ」

ジェス力さんはイスに背をもたれながら俺たちを眺め、微笑ましの表情。

「それにしても、この依頼を請負ってくれたのが、まさかルーちゃんของทีมだったとは。世間は狭いと言うか、何と言うか……」

——ルー……ちゃん？

その語呂に何ともむずがゆさを感じつつ、俺はもう一度ルーの方を向いて、

「……何だ、お前、ジェス力さんと知り合いだったのか？」

「ほへ？　へ……と……」

口をモゴモゴさせながら首を傾げるルー。

「ふふ。覚えてませんかね。まあ、無理もない。あれはルーちゃんが三歳か四歳の頃だったからねえ」

ジェス力さんは懐かしむような目をしながら、

「君は何度かここに来たことがあるんですよ」

「へ？　ほうはっはんへすか？」

「ああ、君のお父さんに連れられてね」

目を見開くルー。………というか、早く口の中のものを飲み込め。色々台なしだ。

俺の念が通じたのか、ルーはようやくゴクンとクッキーを飲み込

み、

「……パパと……ここに……？」

「ええ。コルット博士——あなたのお父さんは、調べ物をしにちよくちよくここを利用してましたからね。休日には、やり残した仕事をしに、あなたを連れて来てたんです。博士が仕事に集中してる間は、私なんかがあなたの遊び相手をしていたものですよ。かくれんぼやらトランプやら。本を読んであげたこともありましたがね」
年相応（六十代後半くらい？）にシワの入った顔を緩ませ、黒目が見えなくなるくらいに目を細めるジェスカさん。

ルーは少々たどたどしく、

「あ、あの、パパ……お父さんは、どんな人でした？ その……あんまり遊んでもらった記憶がなくて……」

「ああ、忙しい人だったからねえ。彼がここに来た日も、大抵本を睨んでばかりでしたから。普段は温和な方でしたが、覚えてるのは彼の難しい顔ばかりですよ。ふふ。でもルーちゃんの遊び相手をするときは、本当に楽しそうに遊んでましたよ。そんな時の彼は、そうだねえ——」

ズズツと、ジェスカさんは紅茶を口に持っていく。そしてコトリとカップを皿の上に置き、

「——今のルーちゃんみたいな人だったよ」

……………。

「ん？ どうしたんですか、ダルク君？ 急に顔を引きつらせて？ ……いや、別にそういう意味じゃなくて、明るくて気さくな人だったということですよ？ そんな、仮にも大人ですし、あの若さで国の研究所の所長に抜擢されるほどの人物だったわけですから。口に物を入れたまましゃべるのは同じでしたが……」

……それだけで十分です。

大の大人の男性がクツキーにがつつく姿が目に見えなくなってしまった。

「……と、ともかく、彼は研究熱心な方でした。探究心の塊と言うか。自分の知らないことが存在するのが許せないようで。だから彼が『銀石』の研究にのめり込んでしまったのも、無理からぬことではあるでしょうね。何せ『銀石』の性質なんて、世界中の誰もが知りたがる謎ですから。まして『銀石』を『作り出す』技術となれば、なおさらです。……………そのためにあんなことになってしまったわけですが」

——あんな事。

この言葉に、ルーは視線を落とす。

『失踪』と言ってしまえば、それはそれまでのことでしかないが、しかし言うのと見るのと体験するのでは、大きく違う。実際に父親がいなくなってしまうのは、まったく違う。違いすぎる。二年もルーを真横で見れば、俺にだって否応なく解る。

「……実は失踪する少し前に聞いていたんですよ。何者かに狙われているかもしれないと。彼からね。別に襲われたりしたわけではなかったそうですが、そんな空気というか雰囲気を感じていたそうです。護衛でも雇ったかどうかと言ったら、『そんな金はない』と一蹴されましたね。逆に単身赴任でどこか一人で引っ越すべきかと悩んでましたよ。ふふ。彼は最後まで家族のことを心配していました」

「……………」

懐かしむような、微笑みのような、寂しさのような表情が、ルーの顔に浮かぶ。

そしてルーはその表情のまま視線を落とし、腰のホルダーにささっている銃を見つめた。

——『青石』の銃『サイキ』。

失踪の直前に、ルーがその父親から貰い受けた武器——だと聞いている。娘に与えるには物騒極まりないものではあるが、しかしどことなく親からの愛情を感じるのは、博士自身が手ずから作ったものだからだろう。店頭に並べられているようなものではない。

その色も形も性能も、一般的なものと異なる。危機を感じていたからこそ、コルット博士はそのタイミングでルーに渡したのだろう。その青い銃を。

「何にしても、見つかっていないということは、会える可能性があるということですからね。早く見つかるといいですね」

「はいっ！」

ジェスカさんの労わる笑顔に、ルーは顔を上げ、決意の混じった声で答えた。

図書館と思い出・後編

「まったくもって、いい迷惑だ。………いや、迷惑に良いも悪いもあったもんじゃないし、きつと初めてこの表現を使った人は皮肉のつもりだったんだろうけど、ここまで浸透するといまいちパンチが弱くなるな。………よし、これからは『素晴らしき迷惑』とでも言おうか。いや、『格別最良の迷惑』の方がいいか？ それとも『神の慈愛がごとき迷惑』？ 『失くした財布を見つけて持って来てくれてあるうことが同情金として倍額を無条件でくれるくらいに良心に満ちた迷惑』も捨てがたいな。………そもそも、あいつらにそんなスピリチュアルアタックが効くのかどうか疑問だが」なんていう、独り言にも似た愚痴が俺の口について出てくる。

もちろん、聞き手がある言葉は独り言なんて呼ばれることはなく、この周囲というかこの部屋には俺しかいないわけで、他の三人は各々の仕事に戻った。つまり、ルーは本整理、ロットは害虫駆除、ジエスカさんは事務作業。何で俺だけがここに残っていたかというところ、今まで俺はこの部屋のテーブルをふきんで拭き、床をホウキで掃くという作業をしていたからだ。

ようは、クッキーくずのせい。ルーとロットがさっきのオヤツで盛大にばらまいてくれたくれたおかげで、俺がこんなことをする羽目になったのである。

掃除自体は五分とかからず終わったので、別にこの作業に費やした労力に関して不満を並べるつもりはないし、俺の精神だって人が寝そべるくらいの広さは持ち合わせているが、問題なのはこれがないくてもよかったことだという部分だ。ここが重要。

たかが五分、されど五分。

この五分の間に足、腕、腰にそれなりに疲労感を溜めたのだ。仕事だっていくらか進んだはず。帰るのが五分遅くなったわけだ。このやるせなさは賃金に跳ね返るものではなく、じゃあその存在理由

は何かと問われて、当然のようにロットとルーへ向かうのである。責任はあいつらにある。そのくせ、ヘラヘラしゃがるし。食後、知らんぷりしてさっさと部屋を出て行ってしまった。

合流したら一言言つてやらねば気が済まんと思ひながら、ふきんとホウキを棚にしまい、部屋を出て廊下を渡り、八つ目の部屋の扉を開けた瞬間、俺のそんなやるせない気分は霧のように消え去ってしまった。

別に、中にいたロットとルーは各々窓磨きと蔵書運びに勤しんでいて、これは俺の予想通りの光景。俺が不信に思ったのは、そこではなく――

――張り詰めた空気。

まるでコントロールされているような無音。肌が総毛立つ。気分が落ち着かない。これ以上この部屋に、入る気がしない。

誰か、この部屋にいるのか？

……いや、そういう気配に関しては、ロットは俺なんかより敏感だ。玄人でもない限り、二十メートルくらいの範囲に入ればロットはすぐに気付くはず。しかし、ロットは相変わらずひょうひょうとした顔で、窓に息を吹きかけている。

……じゃあ、この感覚は何だ？ 確かに――確かに俺は今ここで何かを感じている。しかし人の気配でもないもの。それは、それは――

――殺気、か。

それならば、ロットよりも俺の方が少なからず――いや、だいぶ鋭い。俺はそういうスタイルなんだから、当然。しかし、なぜ殺気？ なぜ今？ なぜ図書館で？

いやいや、そんな勘ぐりは後だ。まず、そいつがこの部屋のどこ

にいるか、だ。

部屋を見回す。

壁、窓、ロット、壁、本棚、ルー、本棚、壁、本棚、壁、窓、壁。

ロットとルー以外、この部屋で動いているものはない。不審なものも見当たらない。当たり前か。ロットに気取られないでこの部屋に入ってる時点で、そいつは玄人だ。

と、

「どうしたの、ダルク？ そんなところにつつ立って。ボーっとしないで、早く手伝ってよ」

ルーがこつちを振り向き、俺の方に一歩踏み出した。その瞬間――

――天井から、影が落ちてくる。

何が？ なぜ？ どうして？

と考える前に、俺の体が勝手に動く。

ルーの頭上、その影の動きに合わせて、ナイフを振る。紫の残像がその影を通り抜けた。しかし手ごたえはない。その影はひらりと翻って、そのまま床へ着地した。

すたん、という音。

そこに立っていたのは、少年。

黒いニット帽から、紫色の髪が覗いている。Ｔシャツにハーフパンツという、アンディさんを思わせるような服装。しかし、さすがにサンダルではない。そして腰や首には、銀色のチェーンが巻きついている。武器や防具ではなく、十中八九アクセサリーだろう。

そんないでたちの男が、悪戯な笑みを俺に向けている。

「え？ え？ 何？ 誰？」

「むむ？ 誰だ、そいつは？」

と状況についていけていないで困惑している他の二人を無視し、そいつは唇を歪めながら、

「へえ、鋭いじゃん」

俺に言う。

「よく気付いたね。どうやら君、部屋に入った時点で感じてたみたいだし。急に立ち止まって険しい顔するんだもん。オレ、思わず焦っちゃったよ。ふははは。まあおかげで、君が素人じゃないってことが分かつちゃった。逆に、分かったからこそ迂闊に手を出せなくなっただけだ」

軽い口調、軽い雰囲気。しかし、警戒は解かれていない。

「君はダルク君でしょ？ やれやれ。見つかるなら、そっちのロツト君の方だと思ってただけだ。いや、見つかる気は毛頭なかったんだけどさ。君への警戒が中途半端になっちゃってたかな。思わぬ伏兵ってやつ？ いやいや、君は見た感じ黒幕ってとこかな？ ふはは。しかし素晴らしいね、君。オレの潜伏を見破れるヤツなんてそうはいないよ？ まして同い年には」

いかにもフレンドリーな表情、言葉。だからこそ、余計に警戒してしまう。俺はナイフを握る手に力を込めながら、

「……お前は、誰だ？」

「オレ？ オレの事聞いてんの？ やっぱこっただけ君らの事を知ってるつてもアンフェアかな？ ふはは。まあ、教えてやるよ。オレの名前はイヴァリー・シャル。愛称はイヴでよろしく、お三人さん。ふはっ」

笑い声が、癪に障る。しかし、そんなことを気にしてる場合じゃない。俺はこいつとの間合いを計りながら、

「……お前、何でルーを狙った？」

「うーん……。まあ、オレがここに来た目的は別だったんだ。ルーさん——というより、君ら三人を殺そうとしたのは、ついでに頼まれたおつかい」

「……ついで？」

「そう。いわゆる、保険てやつ？ 上からの命令でね」

——『上』？

こいつ——こいつらは、組織立ってるってことか？ 俺たちみたいな駆け出しの賞金稼ぎを狙う組織なんて、心当たりが……

「だからさ、こいつで一思いに殺ってやろうと思ったわけだよ」

言いながら、イヴはふともものホルダーから刃を取り出す。

それは、一見ナイフのような形だが、しかしそれだけじゃない。

柄の裏側にも刃が着いている。つまり、柄を挟んで刃が二枚。そして——

「ん？ ああ、これ？ これ特注品。双牙って武器。固有名詞は『フェム』って言うんだ」

言いながら、イヴはそれを指でくるくる回す。

「かつけーでしょ？ ふはは。オレのお気に入り」

得意げに、掌で『フェム』の回転を増していく。確かにそんな武器は店では見たことはないし、使い勝手もなかなか良さそうだし、しかし、一番気になるのはそんなことじゃなくて——

——その刃が黒いこと。

俺にとって見慣れている黒が、その刃にも染められていた。明らかに『黒石』と分かる色。何で、何でこいつが——

棒立ちの俺の横、

「……そ、それ……」

ルーが息を呑みながら、

「……く……『黒石』の……刃……！」

目を見開き、搾り出すように言う。しかしイヴは、

「ん？ そうだよ？」

けろつとした顔で答えた。

「もしかして、見たの初めて？ ふはは。カッコいいでしょ？ これで触れば、何でも切れるんだよ？ ほら——」

イヴは、手近にあった本を空中に放り投げ、目の前でそれを『フェム』で切り裂く。本は音もなく抵抗もなく、二つに分裂し、ばさ

つと床に落ちた。

「——ね？」

イヴが俺たちに向かって、ウィンクをしてくる。

「まあ、逆にそれだけ危険ってことだからさ、扱いが難しいんだけど、逆に慣れれば——」

「……ま、まさかお前が『闇鳥』なのか……！」

ロットが切羽詰った声で言う。そして、まくしたてる。

「最近現れた殺し屋、『闇鳥』。その武器は『黒石』の刃だ。さらに、その刃の刃渡りは短いという検査結果が出ている。ナイフくらいの刃だと、な。それが全部、お前に当てはまるじゃないか。まさか、お前が……お前がそうなのか？ お前が『闇鳥』なのか……！」

ロットの言葉に、イヴは一瞬びくつとその笑顔を消し、鋭い視線でロットを睨んだ。しかし、すぐに視線を床に落として、自嘲気味な笑みをこぼしながら、

「ふはは。おもしろい事を言うねえ、ロット君。本当、おもしろい——おもしろい？」

「そんな推測は考えてもみなかったよ。その発想はおもしろい。あの意味、的確だ。的確、正確、本格。しかし残念ながら、オレはそれを否定しなきゃなんない。そんなことはありえない」

「……言いきれぬのか？」

「ああ、言いきれぬ、言いきれぬとも。言いきれまくるさ。例えば万人が世界平和に賛同しなかったとしても、それだけは万人に対して言いきれぬ。なんせ——」

——オレは『カザミドリ』のメンバーなんだからね」

「……な……！」

「つまり身内なんだ。ふはは。何を隠そう、オレこそが『カザミドリ』の三番隊長だ。ほら、これが証拠」

言いながら、イヴは俺たちにコインを摘んで見せてきた。そこに

見えるのは、鳥があしらわれたデザイン。数週間前に見た、『カザミドリ』のメンバー確認に使われる証明。これは、本物だ。

「……『カザミドリ』のメンバーが俺たちを殺しに来た……てことは、つまり——」

「おっ！ 鋭いね。そうだ。君らが、この前の十三部隊の壊滅に関わってたからさ」

イヴは何ともなしに、悪びれもせず、平然と言い放つ。

「まあ、君らみたいな駆け出しのチームは別にほっといてもいいとは思っただけど、そっちのロット君は結構な期待のホープだからね。無視するにはちよつとつとつとばかり、惜しいんだよね。それに、そっちのルーさんときたら、まあ、無関係ではないし、ね」

イヴはにやけ面のまま、ルーへと視線を移した。ルーは、睨んでそれに返す。

俺はそのやり取りを制するように、

「……なぜそこまでペラペラと自分の素性を話すんだ？」

「ん？ 不自然だった？ そりやそうか、オレたち初対面だし。……」

「……まあ、さ。さっきも言ったでしょ？ オレのこと看破するやつなんて、そうはいないんだよ。俺の顔と名前が一致してるやつなんて数えるほどだ。『カザミドリ』の中ですら、三、四人くらいかな？ だからオレ、友達少なくてね。商売柄、しょうがないんだけど」

イヴは俺にニタリ笑いを向けながら、

「だからさ、今日のはちよつと嬉しかったというかさ、興奮したというかさ。もうオレ、舞い上がっちゃって、舞い上がっちゃって。せつかくだからお近づきになろうってわけ。別に君らを殺すのは急を要することじゃないし、元々の仕事は終わったし」

「……元々の仕事？」

「そ。考えてみなよ。そもそも何で『カザミドリ』の、しかも幹部がこんな図書館に来たのか、その理由」

言われなくても、考えてるさ。

『カザミドリ』の目的は『銀石』を探し出すことのみ。そして、ここにルーの父親、コルット博士が出入りしていたと言うことは――

「――『銀石』の手掛かり、か」

「ご名答！」

イヴは、ぱちんと指を鳴らした。そのわざとらしいアクションが、やたらに俺の気分を逆撫でる。

「まあ言っちゃえば、結局何もなかったんだけどね。だから今日の戦利品は――」

イヴは懷から紙を取り出し、

「――この、コルット博士の貸し出し履歴だけ。百何十冊分もあるんだよ？ 探すの面倒くさかった。あ、これはコピーで、オリジナルはちゃんと残ってるから、後で君らも確認したらいい。ふはは。痕跡も残らないように、気配りはばっちり」

言いながら、グツと親指を天井に突き立てる。

俺たちに見つかってちゃ、痕跡も何もないだろうに。

「んゝ。ちよつと話過ぎちゃったかな？ いや、内容じゃなくて時間、ね。やっぱ同い年だと、話も弾むねえ」

ほとんどお前が一方的に話してたじゃねえか。

「ま、積もる話はまた今度。じゃあ今日はこの辺で帰るね。バイ」
そんなあつけないセリフと共に、ふつと、風が吹き抜けるように――瞬で、イヴの姿が見えなくなってしまった。

――積もる話なんて、ねえよ。

と、言いそびれた。

図書館と思い出・追記

果たして、もうこの部屋には、殺気も、張り詰めた空気も感じない。

イヴは、完全にこの部屋から出て行ったんだろう。目にも留まらぬ速さでドアや窓から抜け出したのか、それとも天井裏や床下に潜んだのか、もしくは『石』でも使ったのか。まあ、ラキだって同じようなことはしてたし、今さら俺は驚かないが。

「しかし、難儀なことになったなあ」

あまりの急展開に立ち尽くす中、ロットが仰々しくため息をついた。

「まさか、『カザミドリ』に目をつけられるとは。軽んじられてるのがせめてもの救いだが、それでもいくらかは警戒しなければならん」

「ホント、困るよね」

ルーが眉をハの字にした苦笑いで、ふるふると首を振る。毎度ながらその緊張感のない仕草に、どうしても俺は業が煮立ってしまう。「……ルー、お前分かってるのか？ お前はさっき、殺されかけたんだぞ？ 俺の反応が遅れてたら、お前の頭でスイカ割りされてたんだ。しかもあいつ、『カザミドリ』の幹部って事は、その実力は相当なもんだ。そんなやつに狙われたんだ。お前も『銀石』を狙うなら——」

「わかってる」

俺の言葉の途中で、ルーが言った。

「うん、『銀石』を見つけるのは、あたしの目標の一つ。重要な目的。だからもう油断なんてしないし、逆に怖気づいたりもしないよ。いつもより強く、輝かしい笑顔をするルー。」

「今日のこと、別に新発見があったわけじゃないけど、それでもパパとか『銀石』に、少しだけ近づけた気がしたの。気のせいかも」

しれないけど、でもそう思う。だからね、もう少しの間は、愛より夢を優先させるから、ね」

そう言っ、ルーは俺とロットの顔を交互に覗き込んだ。

一体どこから急に愛なんて単語が出てきたのか甚だ疑問だが、今までルーの思考を俺が正確にトレースできた試しはなく、またルーの頭の中では俺にはわからない思考が働いてるんだろうと思い直した。

それよりも俺がまず考えるべきことは、

「……はあ」

切られた本の弁償金が、料金から差っぴかれるかどうかだ。

コロノ山と魔獣のタマゴ——その一

「これは貸し一ですよ？ 忘れないでくださいね？」

俺たちの前を歩くギーンが、振り返りながら言ってきた。

ギーンに先導される形で俺の隣をのそのそと歩いているロットは、そのギーンの言い聞かせるような顔に向かって、

「ああ、分かっている。何か困ったことがあったら、いつでも私に言ってくるがよろしい。たちどころに解決してみせようぞ」

と、ふんぞり返りながら答える。いつもながらの尊大な態度だ。

その自信が一体どこから来るのか、こいつと数年来付き合っている俺にも分からない。もはや分かるうとも思わない。最近は見慣れた一つの風景だと思うようにしている。逃避とは言わないで欲しい。

そんなロットの発言に、俺の逆隣をとことこ歩いていたルーがぴくつと反応して、

「ちよつと、ロット、そんな安請け合いしちゃだめだよ。それをいいことにあのスパゲッティ頭にいいように使われちゃうよ？ 貸し

一つは一つ。後で夕飯でもおごつときゃいいのよ」

たしなめるように言ってきた。相変わらずウェリイとは相容れないものがあるらしい。そんな三角関係などどうなろうと知ったこつちやないが、間接的あるいは直接的に俺にまで被害が出るので、そうも言ってもらえないのが現状である。これに関する苦労話を書き綴れば、シリーズものの小説が書けるだろう。別に書きたくはないけど。

そんな二者二様の返答に、ギーンは苦笑いを浮かべながら、

「まあ、何を返してもらうかは後の話ですね。お姉ちゃんに『あいつらに貸しを作っておくのは得策よ』と言われたので、教えるわけなんですがね」

「……ふん、やっぱりあのスパゲッティ頭、何か企んでるのね。腹黒いっただらありゃしない。そもそもあいつ——」

「で、ギーン、その情報屋の家つてのは、あとどれくらいなんだ？」
話が変わる方向に行きそうだったので、俺はルーの言葉を遮るようにギーンに尋ねた。ギーンは再度俺の方に顔を向けてきて、
「もうすぐですよ」

と、歩調を弱めずにさらに前へと進んでいく。

俺たちが現在歩いているのは、レンガで舗装された通り。広くもなく狭くもなくといった、中途半端な道である。

道の両脇に並んでいるのは、古本屋や雑貨屋、アンティークショップなどの、比較的地味目な店のみ。商店街と呼ばれている場所ではあるが、集客力があるのかどうか首を傾げてしまうものばかりだ。俺たち以外、周囲には人っ子一人いない。売り子すら見当たらない。そんな中で、俺たち三人を五分ほど引き連れて歩いていたギーンは、古ぼけたアンティークショップの前で立ち止まった。

「ここです」

そう言っ、俺たちの方に頷きを返すギーン。そのままドアのノブに手をかけ、中に入っていく。俺とルーとロットも、続いてその扉をくぐった。

薄暗い屋内。中は外観と同じような古びた造りだった。壁際に立っている木製の本棚は完全に変色している。図書館を数十年放っておいたらこうなるだろう、というような状態だ。

部屋の奥に螺旋階段が見える。

俺たちが中に入ったのと時を同じくして、上階から足音が聞こえてきた。トストストンと一段ずつ降りてきて、そしてその影が最下段に達したところで、

「あれ？ 誰かと思ったら、ギーン君？」

と、女声が聞こえてきた。さらに俺達の方へ近づいてくる影。窓から入ってくる光に照らされて、ようやくその顔が見えるようになった。それは、紫色の髪を後ろで一つに縛った、黒いローブに身を

包んだ女の子だった。

その少女に対し、ギーンは気さくな微笑を向けて、

「どうも。ご無沙汰してます、ムツナさん」

「やあやあ、ご無沙汰ご無沙汰。どうしたの、今日は？ ……いよいよ私と組む気になったの？」

「……違います」

ギーンは苦笑して答える。

「今日は、お客さんを連れてきたんです」

そう言っただけの方を振り返り、手の平を天井に向けるギーン。

ムツナと呼ばれたその少女は少しばかり首を倒して、

「そっちの三人がそう？」

「はい、そうです。こちらの赤い短髪の方がロットさん、青い長髪の女性がルーさん、黒髪の方がダルクさんです。ギルドでチームを組んでらっしゃる方々です」

「へえ、ギルドの——って、そりやそうか。ギーン君の紹介なら。………えーと、私はムツナ。十六歳。ここで情報屋やってま

す。趣味は寝ること、特技は寝続けること、休日は大体寝てます。

最近ギルドに登録してみようかと思ってるんだけど、なかなかギーン君が首を縦に振ってくれなくて。あなたたちからも頼んでくれないかしら？」

「だから、言ってるじゃないですか」

ギーンは肩をすくめ、

「ムツナさんがうちのチームに参加してくれるなら大歓迎ですけど、お姉ちゃんと別れてあなたと組む気はないんですよ」

「ちえー、つまんないの」

口を尖らせ、拗ねる顔のムツナ。

「……まあ、しょうがない。ギーン君の説得はまた今度にして、仕事の話をしましょうか。………で、どんな情報が欲しいのかしら？」

「ええとだな」

ロットが一步前へ出て、説明を始めた。

「私としては本意ではないのだが、こっちのダルクがどうしても泣きながら請うてきたものだから、私の良心に則って了承してやったのだが、ギルドの依頼を一つ請負ったのだ。その仕事の内容というのはだな、『赤雷鳥のタマゴを取ってくる』という、レストランからの依頼なのだ。しかし図書館などで調べてみたところ、この赤雷鳥というのはなかなかレアな魔獣らしくて、目撃例すら見つからんという有様なのだ。二日かけても何も見つからないもので、早速焦り始めたこのダルクが軽率にもギーンに仕事について愚痴ってしまった。心の広いこのギーン氏が、親切にもこちらを紹介してくれたというわけだ。ということで、赤雷鳥に関する情報を持っていないかね？」

……明らかに事実と違う表現が少なくとも三つあったが（すべて俺関連）、俺はその辺りを無視して聞き流した。ロットに真つ向から反論しても疲れるだけだ。これは、俺がギルドに登録して初めて学んだことでもある。

ロットの一人しゃべりを、「ふーん」と半ば適当そうな顔で聞いていたムツナは、

「……赤雷鳥ね。滅多に人と遭遇しない魔獣だね。確かに情報は少ないけど、三つくらいあるよ」

「ホントか!」

ぐいっと前のめりになるロット。そのロットの胸元にムツナは手の平を差し出し、

「三十ドル」

「……………へ？」

「だから、前払いで三十ドル」

ムツナは声量を大きくして言いなおした。

そのセリフとジェスチャーに、やや困惑した顔をしたロットは、
「三十ドル？ 情報三つに、それはちょっと法外じゃないか？ しかも前払いでは……………」

「だって、その依頼なら、少なくとも八百ドルくらいの報酬はあるでしょ。この情報がない場合にあんたらが右往左往する交通費を考えると、三十ドルでも十分優しい価格だと思うけど。それに、情報っていうのは商品を見せたらそれで終わりなの。だから前払いなのは当然でしょ」

「……………うゝむ、そういうものか」

腕を組んで納得顔になったロットは、次いでポケットから財布を取り出し、札を三枚抜いて、

「ほれ、これが代金だ」

「さんくー」

お金を受け取ったムツナは、ぞんざいにそれをローブのポケットにしまった。

「じゃあ、いくよ。一回しか言わないから、忘れないでね。……………

……いい？ メモの準備できた？ いいね？ いくよ？ ………………ま

ず一つ目の情報、『赤雷鳥は、隣のシリン国の南東の方にあるコロノ山で目撃されることが多い』。この山に巣がある見たい。ここ三年で七件くらい目撃例があるから、そこを探すのが妥当ね。……………二

つ目、『赤雷鳥は火と電気には耐性がある』。これはハンターからの情報。赤石と黄石で攻撃しても無駄なことね。じゃあ、次……………

……いい？ 三つ目いくよ？ ………………三つ目、『赤雷鳥のタマゴは真

っ白いのと黄色がかつてるのがあって、前者が有精卵、後者が無精卵』。料理に使われるのは無精卵の方らしいから、あんたらは黄色つばいのを取って来なきゃだめなわけね。……………どう、わかった？」

「うん、ありがとうっ！」

メモを取り終えたルーが、顔を上げて満面の笑みで答えた。そして俺とロットの方を振り向き、

「じゃあ、明日早速コロノ山に行こっか。いつも通り、朝の九時にギルド集合ねっ！」

コロノ山と魔獣のタマゴ——その二

魔獣というものに関して、俺はたいして詳しくはない。

もちろん生物学の専門書を紐解けば、魔獣と普通の獣の違いについてつらつらと細かく述べられていることだろう。だが、俺はそんな文章に目を通したことなど今まで一度もないし、興味もさほどないのだ。そもそも、犬とキツネが同じ仲間であることにすらまったく合点がいていない俺が、そんなものを読んだところで理解できるとも思えない。それに、俺の周りにそれについてこと細かに知ってるやつなんて一人もいやしない。こんなことは、常識の範疇外の知識なのである。

では学問から離れて、一般的に魔獣というのはどういうものかイメージされているかと言うと、それはつまり「『石』を体内に取り込んでしまった獣」。十中八九餌が何かと間違えて食べてしまったんだろうが、野獣が『石』を体の中に入れてしまい、その子供の子供の子供あたりで変異が発生。特殊な能力を得てしまったと言われている。

その能力というのは、例えば火を噴いたり、冷気を吐いたり、電撃を繰り出したり、あるいは発光したりと様々。全般的に人間にとって迷惑でしかない能力が開眼してしまっているのである。

もちろん、元々突然変異のような形で生まれた生物。その絶対数は少ない。街中をほつき歩いている犬や猫のように、散歩がてらに出会えるような生き物ではないのだ。会おうと思ったら、こちらから会いに行かなければ会えない。それくらい希少なのである。

そんなわけで、俺たちはこれから赤雷鳥に会いに『コロノ山』なる場所へ赴くわけだ。

このコロノ山。隣国の外れの方にある山で、俺たちの町から馬車

で片道八時間以上かかる。つまりここへ出掛ける場合、移動だけでほぼ一日を潰してしまうのだ。

おまけに、向こうに着くのが夜になってしまうと、宿が取れなくなってしまう。せめて夕方六時くらいには着きたい。そう考えると、少なくとも朝十時にはこの町を出なければならぬ。

集合は九時。

これくらいの時間なら、昼食の弁当を買って馬車を手配して、ちようどいい按配だろう。俺はそう思っていたのだが、結局のところ

——時間に三人は揃わなかった。

俺たち三人の中で朝に遅刻するようなやつは一人しかおらず、それは誰かというと、猫がにやあと鳴くことくらいの確信を持って断言できるが、あの厚顔無恥男、ロットである。

俺とルーは九時にはすでにギルドに集まっていたのだが、九時を過ぎて、九時十分を過ぎて、九時十五分を過ぎて、あいつが来ない。

別にこれは驚くようなことはなく、病気になったんじゃないかと来る途中で事故に遭ったんじゃないかと、そんな風に心配することも全然ない。十時くらいまでは待つてやって、罪悪感の欠片もなく現れたロットを俺がなじる（結局のれんに腕押しなのだが）というのが通常パターンなのである。

しかし今回は、そう悠長には待つてられない。野宿するか否かの瀬戸際なのである。

というわけで、俺がわざわざロットの家に迎えに行くことになった。

ロットの家は、アステル城下町の北の端、小高い丘の上にぽつんとある。一体に草の生えた敷地の中の木造一階建ての一軒家。牧畜でも営んでそうな外観である。

俺はその扉の前にたどり着くと、ノックして、

「ロットー？」

『何だー？ ダルクか？ どうしたー？』

中からは、たとえ一流の役者でも演技ではできないだろうというくらいの、本当に俺がここに来た理由が分かっているようなロットの声。俺は「……まったく」と呟きながら、ドアを開いた。

広がった視界には、テーブルに座ってナイフとフォークを握り、アゴをもくもくと動かしているロット。テーブルにはリゾットとサラダが並んでいる。

「……呑気に朝飯なんか食べてるなよ」

「何を言う。朝食は重要だぞ。ここで一日分のエネルギーを蓄えておかなければ、これからの活動が——」

「そういう問題じゃない」

言いながら、俺はため息をついた。

「向こうに着くのが遅くなるから、早くこの町を出たいって、昨日話しただろ。十時には出発したいんだ。……見る、もう九時四十分ギリギリだろ。今ルーが三人分の弁当を買いに行ってる。お前も早く食べ終わして、さっさと馬車の停留所に行くぞ」

「やれやれ、せっかちな」

ロットはカップを持ち上げ、中に入っていた牛乳をぐいっと飲み干した。そして立ち上がり、

「どら、行くとするか—— ああ、その前に、ちょっと待ってくれ」

そう言つて、ロットは部屋の隅へと歩いていく。そこには二メートルくらいの高さのこげ茶色の棚。最上段には、写真が写真立てに入れられて飾ってある。

ロットはそれをしばらく見上げた後、目を閉じて十字を切った。そしてそのまま胸元で手を握り、祈り始める。

……そういや、これがこいつの日課だったけな。

俺は嘆息しながら、それを見守った。

ロットが頭を垂れているその前にある写真。そこには一人の男性

と、一人の女性が並んで写っている。男性の方はある種堂々とした笑顔をしており、女性の方はその隣で穏やかそうに微笑んでいる。二人ともお揃いのセーターを着ていて、バックにはどこかの平原が写っていた。夫婦が庭先で撮ったような写真である。

この二人は、ロットの両親。

今から十六年前——つまり、ロットが生まれた直後——に他界した夫婦。何でも、当時用心棒で生計を立てていたロットの父親が、奥さん（ロットの母親）を連れ立って馬車での移動していた最中に賊に襲われて命を落としたんだそうだ。俺も詳しくは聞いてない。ロットも間接的に聞いた話でしかなく、そこまで詳しくは知らないようだ。

そんなわけで生まれて数ヶ月で一人ぼっちになったロットは、あまり親しくもない親戚の間をたらい回しにされた挙句に、三年前から賞金稼ぎとして働き始め、ここに一人で住むようになったのである。

言ってみれば、ラキと同じ境遇だ。

しかし唯一違うのは、二人両親を失った時期。ラキは五年前、十八の時に一人になったが、ロットは物心がついた時からずっと一人なのだ。ロットは両親の顔など写真でしか知らない。まあ、どちらの方が悲しいのかは、両親が一応健在である俺に推し量るべくもないが。

三分くらい黙り込んだ後、ようやくロットは顔を挙げ、写真が飾つてある棚の脇の壁に立てかけてあった剣を手にとった。

俺はその様を傍観しながら、

「……お前、その剣を手取る前にいつもそんなお祈りしてるのか？」

「ああ、一日も欠かしたことはないぞ」

「お前にしちやよくやるな。親って言っても、顔も記憶にないし、話したこともないんだろ——」

ここで、俺は自分の発言の不注意さに気付き、

「——あ、いや、別にバカにしてるわけじゃないんだが」

「まあ、確かに私は、父上、母上と面識はないが………しかし、繋がりはそれだけでもないぞ。ほら、この通り、形見もちゃんと貰い受けている」

そう言つて、ロットは手に取った大剣を俺の前にずっと見せてくる。

「……え？ それ、形見だったのか？」

「うむ？ お前には言つてなかったか？」

「……聞いてない」

俺は首を水平に振った。

確かに、何でそんなレアな武器をこいつが持つてるのか不思議に思っていたが。……そうか、そういう理由でこいつは後生大事にその剣を使っているのか。そんな大切な剣に、仲間である俺まで切りつけられた経験があることには、どうしても納得できないが。

「とにかく、この剣で以つて、父を手にかけて盗賊、ヒューミッドにあだ討ちをする。それが私の命題の一つなのだ」

剣を背中に刺しながら、いつもの不遜な声で言ってくるロット。

「まあ、敵も敵とて、賊として名を馳せた強者だからな。そう簡単に見つかるとも思っていないし、斬れるとも思っていない。……もし私に何かあつたら、この剣はお前に譲つてやってもいいぞ。ルーでは扱いきれんだろーし、世話になった恩返しというわけだ。……

……さあ、準備は整った。行くぞ」

そう言つて、颯爽と歩き出すロット。

この時の俺は「何を縁起でもないことを……」と、鼻で笑うだけだった。

コロノ山と魔獣のタマゴ——その三

「ぐおー……くおー……」

……俺の右隣がやたらうるさい。

現在、荒野を疾走している馬車の中に俺とルー、ロットが納まっているわけだが、その車内にはカラスだってもうちよい耳障りがいい声をしているだろうとぐらいに、雑音でしかない騒音が鳴り響いている。そのノイズを割かし耳元に近い位置で聞かされている俺は、たまったもんじゃない。俺の不快指数メーターはとづくに振り切れている。

当然のごとく、その音源はロット。

『アステル』を出てから三、四時間の間はロットもぱっちり起きていて、俺にやたらめったら話しかけてきていたのだが（それはそれでやかましかったが）、一時間くらい前からいよいよロットの方も飽きてきたようで（もちろん、興味の無い話に無理矢理相槌を打たされていた俺の方が先に飽きていたのは言うまでもない）、こいつはとつくりと眠りについてしまったのである。言い換えれば、俺はこの一時間、ずっとこの騒音に耐え続けているということだ。……

……ここは何地獄だろう？

「……まあ、いつものことだ」

俺は窓枠にひじをつけて外の景色を眺めながら、もはや悟りに近いレベルに達した諦めのセリフを重たいため息と同時に吐いた――

――吐いたところで、ふと、向かいに座っているルーが目に入った。

「ふんふん、ふふふんふん」

ルーは現在、ロットのいびきを意に介することもなく、まるでピクニックに出掛ける道中のようなこの上なく陽気な鼻歌を歌いながら、手元の銃のメンテナンスをしている。

車輪が石を噛むことに車体がガタゴト揺れ、俺はいい加減腰が痛くなっているのだが、目の前のルーは全然動じていない。銃をいく

つかのパーツに分解し、それぞれにブラシをかけたり油を差したり、さらにそれを紙でふき取ったりという作業をしているのである。これだけアンバランスな状況では手元が狂いそうなもんだが、表情を見る限りは余裕そうだ。何とも手際よく、楽しそうに機械いじりに興じている。

「ふんふふん、ふふふふん……………うふふ、でーきたつ。整備はばっちりだよ。今日はもう、あたしの銃が火を噴くよ」

「……………火は噴かないんだろ」

毎度のことながら、ルーとの会話において七十パーセントの割合で俺に課せられているツツコミという義務を全うすべく、俺はちゃんとツツコンでやった。

ルーがいじくっている銃『サイキ』の動力は『青石』。つまり、冷気なのである。

その仕組みはルーから断片的に聞いただけだが、その冷気で空気を圧縮し、それを機構的になんやかんやして膨張させることで、弾を発射させるそうである。普通の銃よりも威力は落ちるが、しかしこのシステムによって通常は使えない『青石』を弾として発射させることができるのである。『青石』を発射できる銃は、世界中でもこの『サイキ』のみ——まあ逆に、熱を生んでしまう『赤石』や『黄石』は使えないわけだ。

そんな理由で、この『サイキ』は炎は発射できないのである。火を噴けるわけもない。

かような、ルーから教わった知識をもって俺はルーにツツコンでやったわけだが、ルーはぶっくりと頬を膨らませて、

「もうっ、言葉のあやだよ。まったく、ダルクは了見が狭いなー」

と、あからさまに気分を害されたというような反応をする。折角の上機嫌をつままないことで台無しにしないでよ、という雰囲気と言葉の端々に見え隠れしている。

実は、今日はやたらとルーが調子付いているのも元々分かりきっていたことで、今回の仕事の障害が鳥の類だからである。つまり、

鳥は飛ぶ——飛ぶと、俺達と離れる——離れると、俺のナイフやロツトの大剣は届かない——しかし、銃なら届く——銃を装備しているのは、三人の中ではルーだけ——いよいよルーの出番、ということである。分かりやすすぎるロジックだ。

俺は浮かれきったルーの表情をまじまじと眺めながら、

「……ルー。張り切るのはいいいが、張り切りすぎるなよ？　今回はお前の腕に期待しているのも確かだけど、全部お前一人に任せるわけでもないんだから」

「ふふん。そんな心配しないで、どーんとあたしに任せときなつてルーは胸をドスンと叩き、鼻の頭を上突き上げた。

俺はたしなめるつもりで言ったのだが、どうやらルーは『お前の腕に期待して』の部分をとかくポジティブに受け取ったようである……かれこれ二年の付き合いになるが、こいつとの意思疎通はどうも難しい。

今回の障害物は、鳥の類とは言っても魔獣なのだ。危険も伴うし、そう簡単にこなせる仕事だとも思えない。銃一つで完遂できるなんて微塵も考えていない。

加えて、今回のタスクはタマゴの調達　だけ　なのである。

魔獣というのは、世界的に見ても希少な生物。赤雷鳥のようにタマゴが高級食材であるものならばなおさらなのである。できるだけ傷つけない。まして、殺すなんてもつての他なのだ。

レストランのお使いと言えど、ギルドの仕事。そんな簡単な話ではない。

しかし、こんな微妙でやっかいで難しそうな仕事を炎も雷も発射できない銃でこなせるのか疑問に思つかもしれないが、むしろ俺はこの仕事はルーに相性がいいと思っている。ルーの腕に期待しているというのも、本当のことなのである。

確かに、炎や電気に比べて、冷気は攻撃性が低い。だが、それは逆に対象を傷つける確率が限りなく小さいということ。冷気の弾ならば、赤雷鳥に対して何の恐れも躊躇もなく発射できるのである。

判断に迷って隙を作るなんてことはない。

あるいは、これは他の仕事についても言えることである。

基本的に、俺達のような駆け出しの賞金稼ぎは、命の与奪に関わるような仕事に関わることはマレである。たとえ盗人を捕まえるような仕事でも、殺すことはもちろん、傷つけることすらほとんどしない。ただ 確保 して国なりなんなりに突き出すだけなのである。だからこそ、俺達の仕事に『サイキ』は最適なのだ。

メジャーどころである『赤石』『黄石』『紫石』は殺傷能力があるし、『橙石』は幻覚を見せるだけで攻撃力は皆無。先の三つを使うなら、どれもこれも加減をしなければならぬし、生物を狙うなら照準を合わせる必要がある。それだけ時間を要する。

しかし唯一、『青石』にはその制約も欠点もない。

だから、たとえどんな対象でもほとんど加減を考えないでいいし、おおよその狙いをつけただけで発射させても問題はない。この差は、咄嗟の判断が必要な場合ほど如実に現れてくる。ギルドの仕事をこなす上で、極めて重要なファクターである。

ルーの父親は果たしてそこまでの考えがあつて娘に『サイキ』を託したのか、俺の知るところではないが、とりあえず感謝はしている。そして個人的にラッキーだとも思っている。ルーが『サイキ』を持つていること。そして俺がルーとチームを組んだこと。

……あとは、ルー本人がもうちょっと何とかしてくれれば。

俺は遺跡調査の時のルーのタチマワリを思い出しつつ、再度銃いじりを開始したルーの仕草を眺めながら、

「とりあえず今回は、赤雷鳥の巣を見つけたらお前が親鳥を追っ払って、その隙に俺とロットがタマゴを運ぶっていう段取りでいけると思うから。できるだけ親鳥を遠くに追いやってくれよ?」

「まーかせてっ」

ルーは鼻歌の延長みたいな声で答えた——答えたところで、
「お客さん、荒野を抜けましたよ」

ルーの後方、馬の手綱を引いていた御者のおじさんが、のぞき窓

から顔を出して俺達に声をかけてきた。

言われて窓の外を見ると、周囲はいまだに平地だが、緑が増えてきている。車体の振動も軽くなってきた。腰の痛みも少しばかり和らいだ。……もっとも、右隣の「ぐごー」という騒音は継続中だ。

俺は車外の御者さんに届く声量で、

「予定より、早いですね？」

「ええ、今日は調子がいいみたいです」

御者さんは手綱を握ったまま振り返り、俺に営業スマイルを三割ほど含んだ笑顔を向けてきて、

「この分なら、あと一時間で着きますよ」

コロノ山と魔獣のタマゴ——その四

俺達がコロノ村に到着したのは、夕方五時。予定より一時間早かった。

馬車から降り立つと、西の空が赤く染まり始めたくらい。日没までにはまだあと一、二時間程度ある。今から探せば、宿が取れないなんてこともないだろう。もし野宿する羽目になったら出発が三十分遅れた元凶であるロットをいびりぬいてやろうと思っていたのだが、まあ、結果オーライだ。

馬車停留所の一角に立ち尽くし、数時間ぶりの地面の感触を確かめていると、

「ふ……………ううん。ふう、疲れたー」

俺の脇でルーがウーンと伸びをし、ふっと脱力した。そして自分で自分の肩を揉みながら、

「さ、早く宿を取る。もう疲れたよ。お腹も減ったし」

「うむ。宿はこっちの方だ」

手元で地図を広げたロットが前方を指差す。

その指の先を見ると、民家が密集しているのが見えた。確かにそっちが村の中心部で間違いないだろう。宿があるとしたらそのあたりのはず。……………というか――

「――ロット、お前、何持ってるんだ？」

「ん？ これか？ これはこの周辺の地図だ」

そう答えながら、ロットは冊子の表紙を俺に見せてくる。そこには紅葉した山の写真が載っており、さらにその上段には「コロノ村ハイキングのススメ」なる題目が書かれてある。

「慣れない土地だからな。地図は最低限必要だろう？ ……しかし、やれやれ。お前らときたらそこまで頭が回らなかったのか？ まったく、しっかりするがよろしい。私に頼ってばかりではいつまでも成長せんぞ」

ハイキング用の地図を持ってきたやつに言われたくないが……。

「ふむ。山は町をつきつて反対側にあるそうだ。どうする？ 探索は明日だが、今日中に道だけでも確認しておくか？」

「えー、もう疲れたよ。早く宿に行こうよー」

ふるふると首を振りながら、駄々をこねるような口調でルーが言ってきた。

ロットは一つ頷き、

「……そうだな。まずは本拠地を設けるのが先だ。早くしないといい部屋が取られてしまうかもしれんし——よし、まずは宿探しだ。行くぞ！」

拳を前に突き上げながら道を進み始める。ルーも「早くだらりん」としたいよー」と呟きながらそれに続いた。

俺もその決定に特に異論はなく、二人に続いて歩き出したところで、不意に、本当に不意に——

——背中に視線を感じた。

俺は反射的に振り返った。

しかし、ここはただの馬車の停留所。ならされた土の道の上に、三台の馬車が止まっているだけだ。視界は開けており、建物はおろか木の一本もない。人が隠れられるような場所などどこにもない。それぞれの馬車の御者も馬に餌をやったり水を飲ませたりしているだけで、各々の仕事をしているのみ。こちらを気にしている様子もない。

では馬車の中や影にでも隠れているのかと気配を探ってみたが、やはり何も見つからなかった。

……何だったんだ、さっきの感じは？ 確かに、誰かが俺達のことを気にしていた。この御者のうちの誰かが俺達を観察してたつてのか？ それとも別に誰かが——

「ダルク、何をもたもたしているのだ？」

「ダルクー？ 何してるのー？ 行くよー？」

すでに十数メートル先を行っていたロットとルーが声をかけてきた。

俺は慌ててそっちを振り返り、

「……あ、ああ」

そう答えつつ、しかしいくぶんの引っ掛かりと不安を胸に抱えながら、二人の後を追った。

コロノ山と魔獣のタマゴ——その五

「くつつつ!」

「きゃあ——!」

「うおお——!」

コロノ山の山中、そこら中に乱立している木々をかわしつつ枝をぶちぎりつつ草を掻き分けつつ、どんどん汚れて擦れていく服を気にする暇もなしに、悲鳴にしか聞こえない叫び声を上げながら、俺とルーとロットは全力疾走で併走している。

三人が三人とも前だけを凝視して一目散に走っているのだが、俺達の眼前には特に何も動くものではなく、それは俺達が現在何かを追いかけているわけじゃないんだから当然のことで、まあ、つまり、言ってしまうえば、そう、俺達は今、

逃げているのである。

ちらりと後方を伺うと、青々と茂った枝葉の上空に、俺達の周辺の日光を完全に遮るほどの大きな影。数十メートルは離れているはずだが、ここまで届くくらいの風を巻き起こしながら、俺達の後にぴったりとついて追ってくる。

それは——赤と白が混じった羽毛に覆われ、岩もかち割れそうなほど鋭いくちばしを備えた、目算で五メートルはあるくらいの幅を持った巨体を有している——そう、赤雷鳥である。

「ゲエエエエエエ」

赤雷鳥がくちばしを開くと同時に、轟音としか言えないような鳴き声が響き渡った。その空気振動だけで周囲の草木が揺れている。俺は思わず耳をふさぎそうになったが、すぐに思い直してやめた。

……今は走ることに専念せねば。

ここからでも分かるくらい確実に、赤雷鳥はその真ん丸い黒目を完全に俺達にロックオンしている——いや、正確に言えば、こいつが追っているのは俺達ではない。俺の隣を走っているロットが

担いでいる、黄色がかったタマゴだ。

そう。俺達はとりあえず、タマゴを手に入れることはできたのだ。ルーが『橙石』を弾に込めた『サイキ』でもって赤雷鳥を狙い、その衝撃（傷一つつかないごく弱いものだが）と橙色のモヤに驚いて飛び上がったところですかさずロットが巢に進入、無精卵を見つけて運び出したのだ。

しかしまあ、予想の範疇だが、赤雷鳥は本能に任せて俺達を追ってきた。

これは無精卵で、お前がいくら温めても永遠にかえることはないんだから、それならば栄養源として人間に提供してやってもバチは当たらんだろうし、どうしても言うなら一週間分のエサを見返りに渡すのもやぶさかではないんだが——なんていう説得をしたところで、こいつが納得するはずもない。言葉が通じないんだからというか、こいつは交渉の余地なく、問答無用で俺達を殺そうとしてきて——

「グエエエエエエエ」

再度赤雷鳥の雄たけびが聞こえたかと思うと、

——グボボボッ

何かが燃え盛るような音がして、何が燃えたのか振り返りながら確認すると、それは俺達と赤雷鳥の間の 空気 だった。

つまり、火炎放射。

「ぐおっ！」

「きゃあー！」

「うおっ！」

三人同時に飛び跳ねて、どうにかこれを回避。ちらりと俺達が走った軌跡を見ると、そこら中に真っ黒い真円ができています。黒い煙も上がっている。あんななんまともに食らったら、ただじゃ済まない。「ははっ。あんなデカイ体のくせして、なかなか早いではないか。これは予想外だ」

「しゃべってる暇があったらもっと早く走れ！」

遺跡で賊に襲われて以来の絶体絶命な状況だったのに緊張感のない口調で言ってきたロットを、俺はたしなめてやった。

……いや、そもそもこいつは背中に五キロくらいありそうな大剣を携え、さらには両腕でようやく持ち上げられる大きさのタマゴを抱えたまま走っているのだ。合計で十数キロのおもりを装着してるようなもの。いや、走りづらさを考えればもっと不利なはず。

そんな状態だって言うのに、俺と同じスピードを出してるんだから。

タマゴの奪取にこいつを選んだのは正解だった。俺やルーだった一瞬でアウトだっただろう。逆に、赤雷鳥の迎撃にこいつを使えなくなったのだが。

もちろん、俺のナイフが届くわけではない。となると、必然的に赤雷鳥に応戦する戦力となるのは――

「グエエエエエエエエエ」

――グボボボツ

もう何回目だか分からない、赤雷鳥からの火炎攻撃。

俺はこれを跳んでかわそうと足を大きく踏み込んだ――が、

「うおっ？」

柔らかい土に足をとられ、俺はがくりと体勢を崩した。

遅れる反応。熱気が伝わるほど接近してくる火炎。俺は思わず腕で顔をかばった。

と、その時、

「とりゃあ！」

俺の横を遁走していたルーが急に振り返り、火炎に対して『サイキ』の銃口を向け、そして引き金を引いた。

パンツ――パリリン

銃口から放たれた白い直線が炎に達したところで、火炎が赤から白に変色したかと思うと、氷が砕けるような音と共に炎が砕け散った――この現象、俺は一瞬で理解した。ようは『青石』の弾を火炎にぶつけ、消し去ったのだ。

俺は体勢を立て直してもう一度走り出す。

「えへへっ。見た、今の？ 火を凍らせちゃった」

「ああ、助かったよ」

走りながら得意満面の笑顔を向けてくるルーに、とりあえずの感謝の意を表しておく。命を助けてもらったにしてはやたら簡素な謝辞だが、正直、今の俺に余裕がない。

というか、

一体俺達はどこまで逃げりゃいいんだ？ あいつが諦めるまでか？ ってか、あいつはいつになったら諦めるんだ？ 周りに助けしてくれる人なんているわけないし、このままこいつを引き連れて村まで行ったら大惨事になる。

どうする？ どうする？ どうする？

と、俺が考えを巡らしている間にも、

——グボツ、グボツ、グボボボツ

赤雷鳥は火を噴いてくる、今度は三連射。三つの火の玉が俺達に向かってくる。

と、ここでまたルーが、

「とりやりやあ！」

『サイキ』を発動。こちらも三連射。

さっきと同じように炎は凍り、パリンツという効果音が三つ鳴った。

「えへへっ、どう？ あたしもやるときはやるんだから。足手まといなんかじゃないんだからね」

……別に、お前を足手まといだなんて思ったことは一度もない。

その奔放な性格に呆れたことは数え切れないが……。

俺は息が上がっているのでため息をつく余力はなく、心の中だけで嘆息していると、

「……ねえ、あたし思いついたんだけど、あいつが狙ってるのって、そのタマゴなんだよね？ だったらさ、ここで分かれて——」

ルーが、ルーにしては真面目な顔で何やら話し始めた——そ

の時だった。

俺は不覚にも、不注意にも、ルーの方に注意を完全に向けてしまった。そして周囲や足元への警戒がおろそかになってしまった。

俺は気付かなかったのである、気付けなかったのである、気付くのが遅れたのである——いつの間にか俺が、急な傾斜の淵を走っていたことに。

周りに生い茂っている草木のせいで見えなかった。気付けなかった。そうと分からなかった。四方はすべて平らだと思い込んでいた。傾斜なんてないと信じ込んでいた。

俺がこの不注意さを後悔したのは——

——ガクンッ

「うおっ？」

傾斜に足をとられ、そのまま体が傾き、足を踏ん張る暇もなく、重力に抗う術もなく、驚いた顔でこちらを見下ろしているルーと口ツトをただ見上げながら、

坂を転げ落ちている最中だった。

コロノ山と魔獣のタマゴ——その六

俺は目を開けた。

まず目に入ったのは青、次いで雲、次いでまぶしい太陽、次いで白い月、次いで風に揺れる緑——つまりは、空と木々だ。

背中が痛い。ゴツゴツしている。この感触は、考えるまでもなく、地面のそれだ。

目の前が空で、背中が大地——ということは、そうか、俺は地べたに寝っ転がってるのか——いや、それにしても、

……ここはどこだ？

俺は戸惑いつつ起き上がった。

赤雷鳥に追われてる最中に、坂を転がり落ちたところまでは覚えている。そして、その後の記憶がない。ぶつつりと途切れている。

つまり俺は、転げ落ちてる最中に気を失ったのか？

それとも落ちきったところで頭を強く打ち、その前後の記憶が飛んだのか？

……いや、どちらにしろ同じ事だ。とにかく現状を確認しなければ。今はどういう状況なんだ？ 赤雷鳥はどうした？ ロットとル

ーは——

「グエエエエエエ」

遠方から、赤雷鳥の鳴き声が聞こえてきた。音にいくぶん怒気が含まれてる。まだあいつは、タマゴを探し回ってる最中なのか。つてことはつまり、ロットとルーはまだ追われてる最中なんだろう。

俺はがばりと立ち上がった、と——

——ズキリッ

「つつ………てて」

頭に鈍い痛み。俺は思わず額を押さえた。

……転げ落ちる最中、あるいは着地時に頭を打ったのか？ だから俺は気絶してたのか。しかし、そんなことを気にしてる場合じゃ

ない。早く二人を助けに行かなきゃ。

俺は頭に手を当てたまま、再度立ち上がった。そしてふらふらと歩き出したところで、

「もうしばらく安静にしていた方がいいんじゃないかって？」

突然、つんとした声が聞こえてきた。

声がした方を振り返ると、そこにいたのは金髪の巻き毛を揺らし、長いまつげを擁する釣り上がった目つきの、こんな山道には場違いなフリルの着いたドレスをまとった女の子。ガンガンしている頭の片隅で記憶をたどり——いや、記憶を掘り起こすまでもないほどに見知った顔だ——我が商売敵、ウェリイだった。

「……な、何でお前がここに？」

「ふん。別に、ギーンにあなた方がここで仕事をすると聞いたものですから、様子を見に來ただけですわよ」

「様子見って……… やっぱお前、ロットのストーカーなのか？」

「違います！」

ウェリイは思いつきり仏頂面を作った。

「……… というか、折角介抱してさしあげたのにストーカー呼ばわりとは、非道にもほどがありますわよ？」

「介抱？」

言われて、ようやく俺は気付いた。俺の額にはバンソウコが張っており、右の二の腕にはシップが張られていた。これは——

「——お前がやってくれたのか？ ……… そりゃ、ありがとう」

「まったく、ロット様なら喜んでお世話させて頂きますのに、何でよりによってダルクなんぞをわたくしが——」

眉をVの字にしたまま、ぶつぶつと不満を並べるウェリイ。

……… 確かにそうだ。こいつと知り合いになってから一年。俺に対してはいつだってお邪魔虫を見るような、見下ろすような見下すような視線しか向けてこなかった。談笑した記憶もない。こいつの眼

中にはロツトしか目に入っていないのだ。そんなこいつに、俺のことを気にかける義理はない。

こいつが俺を助けるなんて意外も意外だ。死にかけてるならともかく、気を失ったくらいならそのまま放っておきそうなものに

一体全体――

「――どういう風の吹き回しだ？ 俺の面倒を見るなんて？ 何を企んでるんだ？」

「別に、企んでなどおりません」

ウェリイはあくまで不遜に、

「あなたのこと も 大切だからです」

「……俺のこと、も？」

俺のリピートに、ウェリイは取り繕うような表情で、

「あ、これは別に、わたくしがあなたのことを再評価したというわけではありません。わたくしにとつて、あなたは今でもパンの耳みたいなものです。虫けらみたいなものです。言葉を交わすのもわずらわしい――しかし、あの娘にとってはそうでもないようなので」

「あの娘？」

「ふん。わたくしが気付かないとでもお思いですか？ ワイトのことですよ」

言いながら、ウェリイは俺に不審の目つきを向けてくる。

「ここ最近、ワイトはあなたのことを気にしています。ふと気がつく、あの娘はあなたに視線を向けています。そして、ロツト様にも青ガツパにもギーンにすらほとんど話しかけないあの娘が、あなたには時たま話しかける。しかも自分から。疑問の余地なく、悩む甲斐もなく、一目で分かります。ワイトがあなたを気にしていること」

ウェリイはなおも睨むように俺を見据え、

「一体あなたとあの娘に何があったのか、別に詮索する気もありませんし、わたくしはそこまで不躰ではありません。しかし、わたくしにすら受身でしか応じないあの娘があなたのことを気にしている

というなら、あなたがあの娘にとって特別であることは言うまでもありません。そんなあなたに何かあったら困ります。あの娘のために」

ここで、ウエリイはふうと息を吐いた。

「ですから、もし今回のことで少なからずわたくしに感謝しているのであれば、ワイトの見舞いに行つてあげてくださいな」

「見舞い？ あいつ、今、具合悪いのか？」

「ええ………というより、あの娘は体調を崩しがちなのです。今まで数ヶ月に一回のペースで、仕事を休んで病氣療養しています。これはまあ、あの娘の性能のようなものでしょう。その原因も——何となくですが——想像はついてます」

ウエリイの思わせぶりな口上。

俺の脳裏に、あの白い爪がよぎる。

「……とにかく」

ウエリイはやや語気を強めて、

「近日中に、必ず、あの娘の見舞いに行つてあげてください。いいですわね？」

「……ああ、わかった」

俺はこくりと頷いた——頷いたところで、

「ダルクーツ」

後方から俺の名前を呼ぶ声。振り返ると、ロットとルーがこちらに向かつて駆けて来るところだった。ロットはタマゴを抱えていない。……まさか、落としたのか？

「では、わたくしはこれで」

ふいに、俺の傍らに立っていたウエリイはそう呟くと、ロットとルーが来る方角とは反対に向かつて歩き出した。トコトコと離れていく金髪とドレス。

その背中が見えなくなったのは、二人が俺のところにとどり着いたのとはほぼ同瞬だった。

コロノ山と魔獣のタマゴ——その七

これは、蛇足でしかない結果と感想と今後の方針。

合流した時にタマゴを持ってなかったもんだから俺はてつきり仕事失敗したのかと思っていたのだが、実は、俺が気を失っているうちにロットとルーで赤雷鳥をまいてしまったのだそう。

どうやったのかというと、まずタマゴを持ったロットが罠になって逃げ回り、ルーはロットと別れて赤雷鳥の背後を取る。そして後方から『橙石』および『紫石』によって赤雷鳥の行動力を削いでいき、その隙にロットがタマゴを抱えて逃げ切る、というものだった。俺が最後に聞いた赤雷鳥の雄たけびは、つまりルーの総攻撃を受けた時のものだったわけだ。

俺を助けに来たのは、すでにタマゴを村の宿の部屋に保管し終わった後だったのである。

合流後、

「やれやれ、ダルク。お前は肝心なところで抜けているな」

「ふふん、どう？　ダルク？　あたしの腕前は？　惚れ直した？」

となじってくるこの二人に言い返す言葉がなく、仕方なく俺はそのやかましい文句の数々を甘んじて聞いてやった。今回のことに関しては、坂を落ちたのは完全なる俺の不注意であり、言い訳は何もない。悔しいがしょうがない。次で見返してやるしかないだろう。

——そう言えば、

あの着地点——と言うより落下地点と言う方が正しいのかもしれないが——を離れる際、周囲を見回してみたところ、ところどころにコゲ跡があった。小さくまばらで、まるで何かを威嚇したような形跡。十中八九、ウェリイの電撃による攻撃痕だ。

恐らく、周囲の獣を追っ払ったのだろう。

ウェリイは、本当に俺を助けてくれたのだ。

あいつがどういう心情で俺のことを助けてくれたのかその深層心

理までは理解でないが、とりあえず俺は素直に感謝している。もしあいつが守ってくれなかったら、もしかしたら俺は今頃獣の餌となつて胃袋で消化されてたかもしれないのだ。

だからもちろん、恩返ししようと思っっている。

今回のレストランからの依頼は一応これで終わりであり、これから俺達は次の仕事を探さなければならない。そしてこいつらとの仕事探しがいつだって一筋縄ではないことは経験的に思い知っていて、少なくとも一週間はかかることはもはや前提条件のようなものだ。

それはつまり、俺は一週間アステルに留まらなければならないという事。

明日から始まるロットとルーとの会議（という名のなじり合い）も、一日いっぱいを費やすほどではない。時間が作れないこともないだろう。

俺は明日、ワイトの見舞いに行くことにした。

歌うように笑ってた／上

ワイトの家は、アステル城下町の裏路地の、さらに奥にある。

人がひっきりなしに行き交う表通りとは正反対で、この周辺を歩く人間はほとんどいない。いたとしても、表立って歩けないようなプロフィールを持った人間が八割を占めている。いわば、アステルの影のような地区なのである。

ワイトがここに住んでいる理由の一つは、あえて言うまでもないことなのかもしれないが、その左腕だ。

彼女の左腕は、手首から下が存在していない。その代わりに白いクローが取り付けられているのである。

なぜワイトがそんな物騒なものを体の一部にしているのか、一体彼女はどんな過去を持っているのか、その辺りの事情は俺には知る由もないことだが（ウェリイですら知らないのかもしれない）、それらを切り離して考えたとしても、人体の一部が凶器になっている人間が市街を何の気なしに歩くのは、さすがに無理がある。

いくらダボダボのパーカーを着て隠していたとしても、何かの拍子にそれがのぞいてしまったら——そしてそれが周りの人間の目に触れてしまったら——その人を驚かせてしまう。怯えさせてしまう。一瞬で周囲がパニックになる可能性もなきにしもあらずだ。

だから、ワイトは必要以上に人通りが多いところに顔を出さない。暗澹とした場所を選び、隠れるように暮らしているのである。

これはワイトから直接聞いたことではないのだが、聞かなくても分かる。分かりきっていることだ。

そしてワイトがこの場所に住居を構えた二つ目の理由は、彼女の後见人であるウェリイの 趣味 である。

つまりは、ウェリイがこの物件を見つけ、ワイトにここに住むよう薦めてきたのだ。中古の庭付き一戸建て。あちらこちらに中世風の装飾が施された外観、レンガ造りの外壁、そして走り回れそうな

くらいの広さのヤード。これらがウェリーの好みのだ真ん中だったらしい。ここをとかく気に入ったウェリーが、住居を探していたワイトに「ここにしなさい！」と強く推したそうである。

ワイトもワイトで、あの性格だ、お金の無駄遣いなどしない——と言つか、食費と交通費と宿代以外に何も出費しない——もんだから、その貯金は中古物件なら一括で買えるくらいあり、他に反対する理由もなかったので、ワイトも同意したのだった。

これらはすべて、ギーンに聞いた話である。

ちなみに、俺は一度だけこの家に入ったことがある。数ヶ月前にウェリーがワイトの家でパーティをすると言い出し、ロットが招待され、それに付随する形で俺まで呼ばれたのだ。だからワイトの家の場所もちやんと覚えてるし、その内装も記憶にある。割かし古い家でそこはかとなく廃れてはいたが、貴族が住んでそうなそれなりに豪華な雰囲気だった。それに、結構広かった。

あれだけ広いと、逆に一人じゃ寂しいだろう。

別チームとは言え、そこまで縁遠いわけじゃない。しかも、ワイトには一つ借りがある。あいつをないがしろにする気なんて、俺にはさらさらない。

——そんなわけで、俺は別段面倒だとも思わず、むしろいくらかポジティブな印象をもってワイトの看病に訪れたのである。

ワイトの自宅玄関にたどり着いたのは午後二時。

正面から改めてその建物を眺めてみたが、相変わらず中途半端に華やかな家だ。玄関とか窓とか花壇とかもつと飾りようがあるだろうに、そのポテンシャルを活かしきれてない。本当、一人で住むには少々もったいない物件である。まあ、ワイトは見栄えというものにそれほど意味を感じていないんだろ。毎日のようにドレスを纏っているウェリーとは正反対だ。

そんな感想を胸にしまいつつ、俺は玄関脇のチャイムを押した。

中でリンゴーンと鳴っているのが聞こえる。

俺は何ともなしに棒立ちで待っていたが、一分経っても二分経っても三分経っても、中からの返事はない——そうだ。ワイトは体調を崩してるんだ。立ち上がれないほど弱ってるなら、来客を出迎えられるはずもない。それに、昼間とは言え病人なんだ、今も寝てるのかもしれない。

どうしよう？ としばし悩んだが、右腕に抱えているフルーツの詰め合わせを無駄にするのも気が引けるし、俺はワイトの世話係たるウエリイに頼まれたのだ。見返りとして要求されたことなのだ。俺にはこの見舞いを遂行する義務がある。それに、物静かなワイトなら少しくらいのことは大目に見てくれるだろう。

俺はそんな予見を立てて、勝手にドアをガチャリと開けた。

……というか、普通に開いたぞ。カギかけてなかったのか。無用心すぎるだろう。ワイトらしいっちゃあらしいが。

俺は、後でワイトにちゃんと注意しとこうと思いつつ、

「……失礼しまーす」

と割かし小さな声で言いながら、家の中に足を踏み入れた。そして数ヶ月ぶりのワイトの家を見回した、その時——

——ぞくり

俺は総毛だった。

気が重い。肌が痛い。寒気がする。

殺気だ。殺気だ。これは殺気だ。まごうことなき殺気だ。掛け値なしに殺気だ。

誰だ？ どこからだ？

四方、八方、床、天井を探ってみたが、不審なものは何も見えない。何も見つからない。

俺は背中の服の中に手を入れ、そのナイフホルダーに収まっているナイフの柄に手をかけた。

逃げるか？ …… いや、向こうには俺の存在はばれてるだろう。

このまま逃げれば、逆に俺が狙われかねない。標的にされかねない。逃げるのは得策ではない。相手を見つけ、確認し、あわよくば行動不能に陥れなければ、この危機は解決しない。

俺は前かがみの体勢のまま、一步、二歩、三歩、四歩、五歩、六歩、七歩と前へ進んでいく。

……というか、何でこんなところで悪気がするんだ？ ここはワイトの家だぞ？ 民家だぞ？ 私有地だぞ？

——まさか、ワイトに何かあったのか？

俺は、赤いカーペットをしかれた、手すりに金色の飾りがついてるらせん階段を登っていく。一段、一段、慎重に昇っていく。警戒したまま上階へ進んでいく。

そして俺は、二階の一室の扉の前にたどりついた。

ここは、ワイトの寝室だ。

中に入ったことはないが、前に来たときに聞いた。この部屋にベッドがあると。具合が悪いと言うなら、ワイトはここで寝ているはずだ。ワイトはここにいないはずだ。

俺はなおも背中の中のナイフに手をかけたまま、空いた左手でドアノブを回した。そしてギイと押し開ける。

開ける視界。

中心に白いベッドが置かれているだけの、簡素な部屋。

そこにいたのは、ダブルベッドの上でくたりと眠るワイトと、その傍らで黒いナイフを構え、紫の髪に黒いニット帽をかぶり、二カリと俺の方に笑いかけている、俺と同年くらいの、肩にチェーンを巻きつけた、見覚えのある少年——

——カザミドリ三番隊隊長、イヴァリー＝シャルだった。

歌うように笑ってた／中

……俺は混乱している。

「ふははっ。や、久しぶり、ダルク君。オレのこと覚えてる？　ほ
ら、図書館で会ったオレだよ」

俺は俺は、混乱している。

「いやー、しかし、グッドタイミングだね。こんな偶然に会える
なんてさ。何かもう、運命的なものを感じるよね。もしかしてオレ
と君って赤い糸で結ばれてるとか？　ふはっ」

俺は俺は俺は、混乱している。

「まあ、君がこの娘と少なからず縁があつたのは知ってたけど、ま
さか家に遊びに来るほどだとは思わなかった。いや、オレってそう
いうの疎いからさあ。まったく。家で二人きりになって、君ら一体
何するつもりだったんだい？」

俺は俺は俺は俺は、混乱している。

「ふはは。そんな固まってないで何かしゃべってよ。どうせ、今の
君はしゃべることしかできないんだからさ」

……しゃべることしか？

そのセリフに引っかけり、改めて部屋の中を見回して、俺はよう
やく気付いた。

この部屋にいるのは、俺とワイトとイヴだけじゃない。他に――
――他に、全身黒服の人間が六人、壁際に並んで立っている。今の
今まで気配が感じられず、気付かなかった。

「紹介するよ。彼らはオレの部下だ――というより、駒と
言った方が正しいかな？　ようは、三番隊の隊員達さ。一応、アサ
シンのイロハは仕込んでるからね。彼らの気配を感じ取れなくても
無理はない。落ち込むことはないよ」

「……………な、何で――」

唇を震わせながら、俺はようやく声を発した。

「何でお前がここにいる？　というか、何をしている？　ワイトをどうするつもりだ？」

「まあ、見ての通りなんだけど」

鼻で笑いながら、イヴはワイトの左腕を掴み上げる。

「この『白石』を貰いに来たのさ——いや、正しくは返してもらいにきたんだ」

……返してもらいに？　その言いよう、まるで、まるで——

「——ふははっ。そう。こいつの左腕をこんな風にしたのは　カザミドリ　さ」

あっけなく、わけなく、どうしようもない、イヴの告白——
というより、独白。

俺の頭からすつと血の気が引いた。

「そう。もう五年前の話だけど、その頃のオレ達は『石』の特性を応用して、武器——というより、むしろ兵器とも呼べるもの——を開発してたんだ。その一つが、この白いクロー『ツバメ』。接近戦と長距離攻撃、その両方の性能を高めようとして作られたものなのさ」

長距離……攻撃？

「そつ。『白石』なんて滅多に手に入らないもんだけどさ、その性質くらいは知ってるでしょ？　ようは『光を発する』。光速で直進する高エネルギーを放出することができるんだ。これほど遠距離に特化した性質を持つ『石』はない。だから、この『ツバメ』は近距離遠距離双方で無二の性能を持つと考えられ、その能力を試すためにこいつを実験体にしたんだ」

……実験体？　な、何でワイトが……。

「さあ？　こいつの出生なんて知らないさ。生態データくらいは力ザミドリにも残ってるだろうけど。でもそんなの関係なく、別に、ただ——買ったただだよ」

しかしレアな『石』だし折角だからついでに持って行ったのかと思
っていたが———そうか。あいつはあそこに、『白石』を探しに
来てたのか。

「ふはは。さらに言うとな、世間では『白石』と『黒石』っていう
のは希少なものだと言われてるけどさ、この世に存在する数・量は、
実は他の『石』とさほど変わらないんだ。なのに、一般人がその『
白石』や『黒石』を目にする機会は滅多にない。ほとんどない。こ
れはなぜ分かる？」

まさか——

「そつ。オレ達力ザミドリがほぼ独占してるからさ」

……………！

「……ただ、まあ、それでも足りなくなっちゃってね、見落とした
り見逃したりしてるやつを回収してこようと、オレはこんなお遣い
に出向いたわけさ」

ここで、イヴはワイトの手首を握りなおした。そして逆手で黒い
両刃を構える。

「待て！ 何する気だ！」

「何って、こいつをこのまま連れ帰っても邪魔なだけだからさ、『
白石』だけを貰ってくんだよ」

あくまで平坦な声で、イヴは答えた。

……確かに、こいつが今握っているのは『黒石』の刃。『白石』
だろうが、切り離すことは可能だろ。造作もないことだ。しかし——
「——そんなことしたら、その『白石』が暴発するんじゃない……」
「するだろうね」

イヴはけろりと言い放った。

「でも、心配ないさ。オレは発動するまでにこの部屋を離れるくら
いの身のこなしは持ってるし、こいつはそういう耐性がある——
———というか、そういう品種改良を施してる。だからまあ、『石』が
暴発してもこいつは生き延びるだろう」

いや、それはお前とワイトだけじゃないか。この部屋には、他に

も……。

俺はちらりと、周囲の六人の黒服をうかがった。が、彼らは無表情で、まるで置物のようにそこにあるだけだった。

「ふはは。言っただろ？ そいつらはオレの駒なんだ。自分の意思で動くことなんて許してないし、君が彼らのことを気にする必要はないよ——というか、やれやれ、ずいぶん話し込んだじゃったね。まったく、君は話しやすいなあ。オレはオレで早く仕事を済ませなきゃならないのに」

いつだかも聞いたようなセリフを言ってくるイヴ。そして、

「さ、じゃあ行くよ」

イヴは『フェム』を振り上げた——振り上げたところで、

「い……いやっ」

ワイトの体が身じろぎした。

いつの間にか目を覚ましていたのか。怯えるような目つきでその黒い刃を見つめ、捕まれた左腕を振りほどこうと右に左に体をひねらせる、

しかし——

「——おっと」

そんなわざとらしい声と共に、イヴはワイトの右腕に刃を振り下ろした。

ヒュンツという風きり音と共に、

「きゃっ」

悲鳴を上げ、苦痛にあえぐワイト。その動きが一瞬固まる——

——見ると、その右腕には赤い筋ができ、そこからだらりと血が滲み出してくる。

と、刹那行動をやめたワイトの隙を突いて、黒服の五人がワイトに飛びかかった。がっちり腕や足や頭を押さえつける。そして残りの一人は——相変わらず壁際に立って、まるで見張るようにじっと俺を観察している。

「ほら、動くんじゃないよ。手元が狂うじゃないか。じっとしてな

さい。ほら、行くよ？」

そんな、幼児に注射する看護師のような声音で語りかけながら、
イヴは

——簡単に、

——単純に、

——難なく、

——そつなく、

——ワイトの左腕に、黒い刃を振り下ろした。

俺は思慮なく考慮なく反射的に、部屋から飛び出た。

そして扉を蹴り 閉める。

ボタンと鳴った瞬間だった。

扉の隙間から、白い光が漏れ差しきて、

——六人分の断末魔が響き渡った。

歌うように笑ってた／下

俺が部屋を飛び出てから五秒後には、もう何も聞こえなくなっていた。

俺は恐る恐る扉を開き、再度部屋の中に入る。

そこに残っていたのは、少し焦げついた空っぽの空間と、ベッドの上で放心しているワイト。瞳孔を開き、床の一点を見つめている。見つめ続けている。痺れたようにまったく動かない。動こうとしない。

……見たところ、外傷はないようだ。

イヴの言葉は本当だったのだろう。その白い肌には傷一つついていない。髪も純白のまま。まるで何事もなかったかのような外見である。しかし——その左手首の下の空間には、もはや空気しかなかった。さっきまでそこにあったはずのものが、ぽっかりと消えていた。

その切断面からは、ぽつぽつと血がこぼれている。

刻々とシーツを染め上げている。

そしてその紅色の周囲には——それが数秒前まで何であったのか、何と呼称されていたのか、どのような機能を持っていたのか、どのような動作をしていたのか、どのような使命を持っていたのか、どのような意思を持っていたのか、そんなことはもはや関係なく、ただ単純に黒い消し炭としか言いようがないものが付着していた。少し記憶をたどればそこには確か誰かが立っていたはずだと思う位置に、点々と黒が落ちている。ただ——ただそれだけだった。すでに俺とワイトしか存在しないこの部屋。一瞬のような永遠のような静寂が辺りを包み込んだ後、

「あ……あ……ああ……あ……」

うめき声。

「……あああ……あ……ああ……あ……」

ため息。

「……ああ……あ……あ……ああああああ……」
感嘆。

「……あ……あ……あ……あ……あ……ああ……あああ……」
涙。

「……ち……ちがう……そんな……こ……こんな……ちがう……ち
がうちがう……そんな……そんな……つもりじゃ……あ……ああ
……あああああ……ちがう……ちがうちがうち……がうちがうち
がう……ちがうの……わたし……そんなんじゃ……ちがう……ち
……がう……」

ワイトはゆっくり首を回し、俺を見上げながら、

「……ちがうの……わたし……そんなつもりじゃ……こんなはずじ
ゃ……ご……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさいごめ
んなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
目を見開いた表情のままで、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ
いごめんなさいごめんなさい……ゆるしてください……ごめんなさ
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ
いごめんなさい……」

全身をかたかたと震わせて、

「もう……もうしませんから……もう……もうにどしませんから
……だから……だからだから……おねがい……おねがいしま
す……あなたは……あなただけは……わたしを……みすて……ない
で――」

――わたしを……みかぎらない……で」

その白い頬を伝う涙に、ほんの少し気をとられる。

そして思う。

思ってしまう。

……別にいいじゃないか。

ここにいた連中なんて、人殺しを何とも思っていない、人の道を外れた奴らばかりだったんだ。人でなしの人でなしの人でなしの人でなしでしかない奴らしかいなかったんだ。

そんな奴ら、殺されたって文句は言えないだろう。

殺された時点で、何も言えないわけだけど。

だから、ワイトが気に病む必要なんてない。

後悔する理由なんてない。

——と、思ってしまうのは、俺だからか？

生まれた時からそういう道の上にいた俺だからなんだろうか？

ふと、思い返す。

いつだか、ワイトが俺に言った言葉。

『私とあなたは……似ている』

あの時の俺は首をかしげるだけだったが、今なら結論を出せる。完全に否定できる。

こんなことで涙を流すなんて、俺とワイトは違う。違いすぎる。

たかだか数人の存在が消えただけで、ワイトの心は折れてしまった。

砕けてしまった。破綻してしまった。自分の 性能 によって

人間が消えてしまったという、ただそれだけの理由で。

それを意図したのはあいつなのに。

ワイト自身ではないのに。

ワイトに責任なんてあるはずもないのに。

そんなに人が消えるのが怖いのだろうか？

目の前で人が絶えるのが恐ろしいのだろうか？

それとも、何かしらのトラウマでもあるのだろうか？

そっという過去があるのだろうか？

何かを抱えているのだろうか？

……いや、それにしても——あるいは、だからこそ——俺とワイトは違う。まったく違う。似ているけど違う。似ているだけで違う。似ているから違う。

——何だ、そういうことか。

俺はようやく思い至った。

確かに、俺とワイトは至極近い場所に立っている。近い内面を持つている。しかし、肝心のボーダーラインは俺とワイトの間に描かれているのだ。俺とワイトを分断しているのだ。俺とワイトを分け隔てているのだ。

だから、俺とワイトは違う。

似ているけど違う。

つまりは、そういう結論なんだ。

俺はふうと息を吐いた。

そしてワイトに近づいていき——そのうなだれた白い髪を優しく撫でる。

「……大丈夫だ。たとえお前がデッドラインを踏み越えたとしても、俺はお前を見限らない。見誤らない。見捨てない。むしろ、お前のことを抱き寄せてやる。抱きかかえてやる。抱きしめてやる。……それに、もしお前がそのラインを飛び越えなかったとしても、その場合はきつとウェリイやギーン、ロットやルーがお前の傍にいてくれる。お前と一緒に生きてくれる。お前のことを大切にしてくれる。どちらに転ぼうとも、お前は決して一人きりにはならない。だから気に病むな。怖がるな。後悔するな——」

——安心しろ」

ワイトの髪をくしゃりと包みながら——

——歌うように、
——謡うように、
——詠うように、
——唄うように、
——謳うように、
——ウタウように、
俺はそう言った。
そう言って、笑った。

——ワイトは赤く染まったシーツの上に涙をこぼしながら、こくりと、一つだけ頷いた。

『闇鳥のナキカタ』に続く

歌うように笑ってた／下（後書き）

後書き

というわけで、『闇鳥のウタイカタ』でした。お読みいただき、ありがとうございます。

本作を書き始める時点で、このシリーズを三部作にすることは決めていた（というか、三つに分けないと話がまとまらない）ので、真ん中である本作は短編集のようなテイで書かせていただきました（時系列順ではありませんが）。

まだ次作の話がまとまりきっていないので、今後時間が空いたり、更新が遅れてしまうかもしれませんが、何卒ご容赦の上お付き合いくださいなと思います。

よろしく願います。

式織 檻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8184c/>

闇鳥のウタイカタ

2010年10月8日15時14分発行